

私と超音波

石田秀明

秋田赤十字病院

超音波は極めて不完全な検査法である。ガスの後方が見えにくい。体型が診断の精度に影響する。そして情報取得が術者の技量に左右される。何でこんな検査法が巷に普及したのか？それは、超音波が持つ優れた力による。優れた空間分解能と軟部組織の表現力、なにかずく飛びぬけた時間分解能、による。私が超音波に魅せられたのはその高い能力ともろさの奇妙な共存によるところが大きい。つまり極めて“人間的”なのです。美しい超音波画像が私たちを感動させるのはそこに人間を感じるからです。走査は道であり、完成された画像はアートです。30年も超音波と関わってくると正直いろんなことがありましたが、(今回は特別企画:随筆集という事もあり)、私と超音波の個人史のターニングポイントを淡々と記します。

1:どこで超音波と遭遇したの？

私が学んだ東北大学は昔から変わり者が多く、当時ほとんど相手にされていなかった超音波(まだピコピコという信号が出たの出ないのというレベル)に引き付けられた医師と工学者が結構多かったのです(先見の明があったのか、単なる気狂い部落であったかは未だ不明ですが)。医者に成り立ての頃そのピコピコを見て“将来超音波の時代が来る”と医局で唱えて周囲から“あほじゃないか。あんなもんがー”と罵倒の嵐にあったことがあります。唯一講座の教授だけが“超音波はきっと将来伸びるよ。頑張りなさい”と励ましてくれました。(この教授は、誰にでも“OO(ここは相手をみて変える)は伸びるよ。頑張りなさい”と言うのが常だったそうです。天上人からの(当たりかまわぬ)激励効果は絶大で若い私はすっかりその気になりました。教訓:若者に投げる一言がその人の人生を決定することがあります。心して話しましょう。

2. どうして高名な超音波学者たちと知り合ったの？

現在の日本人は、他人から浮くことを怖がり自分の考えを表明できない空気が強いですね。その終末像は、やがて自分の考えもなくなり日々の惰性の中に埋没する、というものです。本当に“形”にこだわり“中身”をおろそかにしがちです(この逃げを“空気が読める”といいます。だからいつまでも、二流国なのでしょう。ただ戦後のある時期かなり自由な教育がなされたこともありました。1980年頃までですね。私はその時代、本業と無関係のフランス語に夢中になり転職を真剣に考えました。不思議なことに、それを阻むように、病気になり転職は断念。失意で医者を継続。フランス語は封印したのですが、神のいたずら。当時世界超音波医学会の会長だったFrancis Weill(似顔絵参照)と学会で遭遇するようなきまぐれシナリオを用意したのです。彼はフランス語を(少し)使える私をとて可愛がってくれました。Besancon 大学で1時間も講義をしたことを今でも鮮烈に思い出します。それ以後、フランス語圏内の多数の著名人達と親しくさせていただきました。他人と同じになると自分の存在理由がなくなる、と独自性を追求して止まない思想大国フランスとその偉人達のすごさを目の当たりにして大いに勉強になりました。私が得た結論は、頭脳や業績では彼らに永遠に勝てない。私が彼らをしのげるとしたら、唯一、(彼らは皆定年になるとすっぱり超音波を絶って趣味(登山、料理、絵、など)に専念している)超音波を続けること。それが私が出来る超音波の神様に対する奉仕で社会貢献でもあり、偉大な諸先輩を抜ける唯一の道、と信じています。教訓:自分を高める秘訣は、少し無理な仕事を引き受け続け、やり続けること。

3: 超音波とどう向きあっていくの？

超音波は難しくゴール無きマラソンです。私自身、毎日悩みながら6時間も検査をしています。それでも分からないことだらけです。ただこの“もがき”が自己研磨になる、と信じています。事実、毎日(手のひらサイズの)小さな発見をします。これが人生における“宝石”です(他人には単なるガラス玉と映るかもしれませんが)。その発見を単純化して次代に伝えることで宝石は一層輝くのです。それを毎日心がけています。教訓:技術は伝わるものではなく、伝え



るもの。

最後に。若手の方もっと元気を出して下さい。ぼこぼこにされても、とんでもない失敗しても、それが将来のエネルギーになります。まず、行動すること。そこから何かをつかめます。昨日は今日の過去であり、今日は明日の過去です。素晴らしい明日のために今日一生懸命生きましょう。困ったらどうぞ遠慮なくご相談を。

Hideaki Ishida <ishida@archosp-1998.com>

